●２００７年
２月11日（日）

CSR（企業の社会的責任）「赤城自然塾」構想を読み解く

● 場　所
第八研修室

参加者：19名（男性15名・4名）
１．趣旨説明（9:00～9:05）：伊藤泉氏
（NPO法人CCC自然・文化創造工場関東事業部理事長）
２．自己紹介（9:05～9:40）：参加者各自
３．CSRについて（9:40～10:10）：伊藤泉氏
● CSR（企業の社会的責任）の概念説明
- 企業活動について、説明責任を果たすこと
- コンプライアンス（法令遵守）、環境活動やNPO法人への協力などもCSRの一環
- 消費者にプラスイメージを与える「ハロー効果」を期待
- 「偽善ではないか」という意見もある
- 企業の目的は利潤追求。日本では会社（社員）第一・株主二の次＝CSR二の次（余剰資金で対応）。欧米では株主第一＝CSR第一。
- 日本型CSRは、進みは遅いが着実に進む。

● 分科会経緯説明
- 2005年度：各企業（沖電気、東京ガス、東京電力、サンデン、三国コカコーラ、NPO法人CCC関東事業部）のCSR発表
- 2006年度：CSR有効活用「企業とNPO・ボランティアのマッチング法」

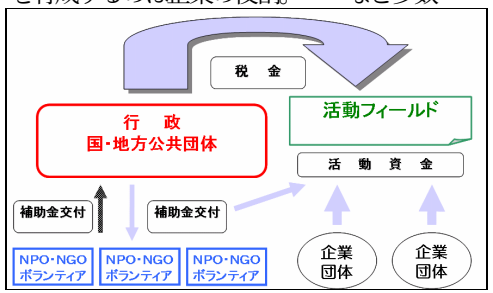
～～～～～～～～～～～～～～～～休憩～～～～～～～～～～～～～～～～

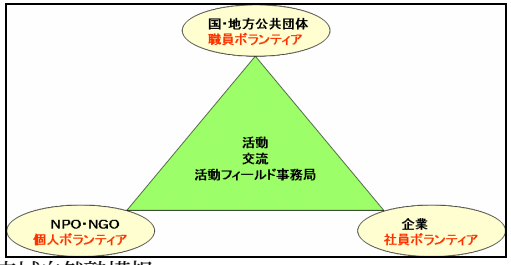
４．事例発表：Hondaの社会活動（10:20～）：坪川幹雄氏
（本田技研工業株式会社　社会活動推進室）
● Hondaの社会活動のあゆみ・社会活動理念・方針
● 活動事例（特に環境保全について詳しく）
- 大きく三つ：次世代教育支援、交通安全、環境保全
  ✧環境保全活動として：ビーチクリーン活動、森林保全活動、Honda Tree Fund、中国砂漠植林「喜びの森」、ハラウソ小学校への支援など
- 日本からわざわざ遠い所まで来て植林する事が、地元政府及び地元民の心を大きく動かす。

● 各企業の様子
- H社は地元と共同。プロ（NPO）に依頼。優秀なNPOを見つけることが大事。
- S社は、自社でやる。東京の人間がやる。地域との接点は少ない。
- S社はゴルフ場計画が頓挫。環境整備から始めようとしたがわからず、NPOを設立し連携しやすい形を作った。
- O社は、社員が参加しやすいように、日程の設定等を検討。制限が多いためボランティア休暇の利用は少ない。
- C社はCSRがない。勉強しにきた。会社としては大きくなったがクレーム等も多くなった。対応として、商品の仕様説明だけでなく、商品が持っている意味を最初に伝えるようにしている。

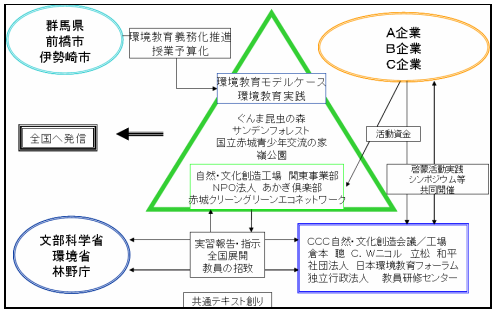
～～～～～～～～～～午前セッション終了・休憩～～～～～～～～～～

５．ゲーム・スピードボール：岸氏（13:00～13:20）
● 新たな情報の重要性（情報の発信・受信＝交流）
● 交流＝文化の創造
６．社会活動の現状・今後　～企業・団体から個人へ～
● 下図、右図をもとにフリーディスカッションを行い企業との連携について議論された。
- 行政が資金援助なしに民間へ要請する事例が増加
- 企業の活動と個人の活動を区別することが大切
- CSRからPSRという考え方もあるのか(P＝パーソナル)
- 個人の責任を持った社員を育てる。社員ボランティアを育成するのは企業の役割。　など多数





７．赤城自然塾構想
● ６の議論に基づき、赤城自然塾構想（下図）に対する意見が出された。
- 赤城エリアで企画する意義を見つけたほうが良い。
- 他との差別化が必要
- 地域の利害関係者のあぶり出しが重要
- 学生にとって、企業・NPO・行政の三者に関われるのは良い
- 横断的な影響力を持つ行政部署をターゲットにしたほうが良い
- 見切り発車は出来ない　など多数



８．参加しての感想（全員）
● どうやったらハートに火がつくのか？を考えていきたい。
● ３年、５年のスパンで考えるのではなくて、10年・50年先を考えて企業のCSR、連携を考えていきたい。　など

（レポート：ぐんま環境教育ネットワーク　諏訪博彦）